

【旧約聖書日課】創世記 32章23～33節

²³その夜、ヤコブは起きて、二人の妻と二人の側女、それに十一人の子供を連れてヤコブの渡しを渡った。²⁴皆を導いて川を渡らせ、持ち物も渡してしまうと、²⁵ヤコブは独り後に残った。そのとき、何者かが夜明けまでヤコブと格闘した。²⁶ところが、その人はヤコブに勝てないとみて、ヤコブの腿の関節を打ったので、格闘をしているうちに腿の関節がはずれた。²⁷「もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから」とその人は言ったが、ヤコブは答えた。「いいえ、祝福して下さるまでは離しません。」²⁸「お前の名は何というのか」とその人が尋ね、「ヤコブです」と答えると、²⁹その人は言った。「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。」³⁰「どうか、あなたのお名前を教えてください」とヤコブが尋ねると、「どうして、わたしの名を尋ねるのか」と言って、ヤコブをその場で祝福した。³¹ヤコブは、「わたしは顔と顔を合わせて神を見たのに、なお生きている」と言って、その場所をベヌエル(神の顔)と名付けた。

³²ヤコブがベヌエルを過ぎたとき、太陽は彼の上に昇った。ヤコブは腿を痛めて足を引かずっていた。³³こういうわけで、イスラエルの人々は今でも腿の関節の上にある腰の筋を食べない。かの人々がヤコブの腿の関節、つまり腰の筋のところを打ったからである。

【使徒書日課】コロサイの信徒への手紙 1章21～29節

²¹あなたがたは、以前は神から離れ、悪い行いによって心の中で神に敵対していました。²²しかし今や、神は御子の肉の体において、その死によってあなたがたと和解し、御自身の前に聖なる者、きずのない者、とがめるところのない者としてくださいました。²³ただ、揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、あなたがたが聞いた福音の希望から離れてはなりません。この福音は、世界中至るところの人々に宣べ伝えられており、わたしパウロは、それに仕える者とされました。

²⁴今やわたしは、あなたがたのために苦しむことを喜びとし、キリストの体である教会のために、キリストの苦しみの欠けたところを身をもって満たしています。²⁵神は御言葉をあなたがたに余すところなく伝えるという務めをわたしにお与えになり、この務めのために、わたしは教会に仕える者となりました。²⁶世の初めから代々にわたって隠されていた、秘められた計画が、今や、神の聖なる者たちに明らかにされたのです。²⁷この秘められた計画が異邦人にとってどれほど栄光に満ちたものであるかを、神は彼らに知らせようとされました。その計画とは、あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望です。²⁸このキリストを、わたしたちは宣べ伝えており、すべての人がキリストに結ばれて完全な者となるように、知恵を尽くしてすべての人を諭し、教えています。²⁹このために、わたしは労苦しており、わたしの内に力強く働く、キリストの力によって闘っています。

【福音書日課】マルコによる福音書 14章26～42節

²⁶一同は賛美の歌をうたってから、オリーブ山へ出かけた。

²⁷イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたは皆わたしにつまずく。

『わたしは羊飼いを打つ。』

すると、羊は散ってしまう』
と書いてあるからだ。²⁸しかし、わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く。」²⁹するとペトロが、「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません」と言った。³⁰イエスは言われた。「はっきり言うておくが、あなたは、今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう。」³¹ペトロは力を込めて言い張った。「たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません。」皆の者も同じように言った。

³²一同がゲツセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、「わたしが祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。³³そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたが、イエスはひどく恐れてもだえ始め、³⁴彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」³⁵少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、³⁶こう言われた。「アッパ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」³⁷それから、戻って御覧になると、弟子たちは眠っていたので、ペトロに言われた。「シモン、眠っているのか。わずか一時も目を覚ましていられなかったのか。³⁸誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」³⁹更に、向こうへ行行って、同じ言葉で祈られた。⁴⁰再び戻って御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠かったのである。彼らは、イエスにどう言えばよいのか、分からなかった。⁴¹イエスは三度目に戻って来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。もうこれでいい。時が来た。人の子は罪人たちの手に引き渡される。」⁴²立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」

眠られない夜、祈る【こども説教のために】

日曜日の教会に集まって来られる皆さんの多くは、何よりも礼拝にあずかるためにいらっしゃっていることでしょう。牧師や他の奉仕者も、おいでの皆さんが礼拝にあずかることに集中できるようにと、準備してお迎えしています。だからこそだと思いますが、お帰りのときに、申し訳なさそうにおっしゃる方があるのです、「今日は、説教中に眠ってしまいました」と。

ご安心ください。礼拝中に眠る人は、天上の礼拝にあずかっているのです。そのような方のことを、わたしは、安心して神にお委ねできます。むしろ、気に掛けないでいられないのは、緊張して身動きもせずに神経を研ぎ澄まして礼拝堂の座席にお座りの方です。もしかすると、昨晚も心配事が尽きずに、眠られない夜を過ごされたのではないかと、想像せずにいられません。

主イエスは、十字架につけられる前の晩、弟子たちが睡魔に襲われる中、ひとり眠られない夜を過ごされました。祈るしかない夜を過ごされました。族長ヤコブの物語の中にも、ひとり眠られない夜を過ごす場面が繰り返されます。ヤコブは、そこで神と向き合うことを知りました。祈ることを知ったのです。

眠られない夜、神は、そっと近づいてきてくださるのでしょう。

格闘して、生きる

わたしたちの教会でオンラインの礼拝を始めて二年半になります。広く公開しているわけではありませんが、それでも、概ね、日曜日に礼拝堂まで足を運んでくださる方と同じ程度の人数の方が、オンラインで礼拝にあずかってくださっているようです。来堂が困難であった方が、それぞれの場所で礼拝に加わってくださっているとお知らせいただいています。

とは言え、できれば来堂して礼拝にあずかっていたきたい、というのが本音です。自宅でのオンラインのほうが一人礼拝に集中できる、とお考えの方もあるかもしれません。確かに、来堂して礼拝にあずかれば、多くの方と挨拶しなければいけませんし、もしかすると、あまり顔を合わせたくない人とも顔を合わせなければいけないかもしれません。同じ空間にいるのに、顔を合わせないようにと目を逸らし続けるのも、愉快的ことではありません。それならばと、以前であれば、もう礼拝にいらっしやらないか、ほかの教会に行くことをお考えになるところを、オンラインの礼拝を続けてくださっているのであれば、それはそれで仕方ないとも思います。

確かに、神を礼拝し、神の御言葉を聞こうというのであれば、他の人に邪魔されずに一人、礼拝に集中したいと思うのは当然です。讚美を共にすることと、御言葉を聞き祈りで応答することとを両立させようと思えば、礼拝堂で互いの距離を保つことも、有効でしょう。けれども、それでも、皆さんが神を礼拝し、御言葉を聞き、祈りをもって応答されるときに、他の人の存在を消してしまうようなことは、なさらないでいただきたいのです。

主イエスは、弟子たちを伴って祈ることを意識してなされていたと思われる。十字架にかけられる前の晩、弟子たちとの最後の晩餐を終えた後に向かわれたオリーブ山のゲッセマネという場所は、他の福音書が伝えるところによると、主イエスと弟子たちがいつも祈りの場とされていたところでした。そこに連れ立って行き、弟子たちが傍らにいて、主イエスは祈られていたのです。弟子たちに、祈りの手本を示そうとされたのかもしれませんが。しかし、彼らが居眠りしていても、主イエスは、彼らの傍らで祈られました。それは、主イエスの祈りが、彼らのための祈り、彼らを心に留めることなしには為されない祈りであったからではないでしょうか。

「創世記」の族長ヤコブは、見知らぬ何者かと格闘し、**顔と顔とを合わせて神を見る**という体験をしました。それは、しかし、「神との格闘」ではなく、**神と人と闘ったこと**だったと描かれていました。ヤコブは、このとき、かつて相続争いをした双子の兄エサウと再会しようとしていました。家族もいました。その人たちのことを心に留め、葛藤することと、神と向き合っ**て格闘すること**とは、ひとつのことであったということなのでしょう。

眠る者たちの傍らで

主イエスは、ご自分のためだけでなく、弟子たちのためにも祈られています。いいえ、弟子たちのことを思って祈るからこそ、主イエスの祈りは、葛藤にまみれていらしたのでしょうか。ご自分の救いではなく、弟子たちの救いを願われていらしたのです。ご自分の生かされることではなく、弟子たちの生かされることを求めていらしたのです。

だからこそ、主イエスは、神に問わずにいられなかったのでしょうか。神と格闘せずにいられなかったのでしょうか。「アッパ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください」と自分のことを願いながら、なお、「しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」と続けたいではいられなかったのです。主イエスの祈りこそ、「神と人と格闘された祈り」でした。

「そうは言われても、自分は、なかなか主イエスのように祈ることはできないし、ヤコブにも及ばない」とおっしゃる方もあるかもしれません。

確かに、わたしたちは、神に祈るときにも、自分本位です。格闘というよりも、一方的に神に請求書を突き付けるようにして、自分の願いを実現しようとしたりしてしまうのが、わたしたちの祈りかもしれません。しかも、わたしたちは、自分のしようとしていることを承認し助けてくださることを願うばかりの祈りをしているという自覚さえないことが、少なくないのです。

そうであればこそ、主イエスは、弟子たちをご自分の祈りに伴わせようとなさったのではないのでしょうか。しかも、夜に。彼らが眠くなってしまう時間に。彼らが居眠りしてしまうことを見越して、祈りに伴わせたのではないのでしょうか。

「目を覚まして祈っていなさい」と勧められても、目を覚ましていることも、祈っていることもできない弟子たちの傍らで、主イエスは、祈り続けられました。彼らのために祈り続けられました。弟子たちは、それが、自分たちのための祈りであると、まもなく気づいたのです。少し遅すぎましたが、主イエスが十字架の上で死なれた後、弟子たちは、主イエスがあのとき、自分たちのために祈ってくださっていたと知るようになったのです。いいえ、あのときだけでなく、いつも自分たちのために祈り続けてくださっていたと知るようになったのでしょうか。そして、「あなたがたも、目を覚まして祈っていなさい」という主イエスの言葉に、ようやく、応えられるようになったのでしょうか。

わたしたちも祈られてきました。主イエスに、先達に、教会に、祈られてきました。だから、祈るのです。傍らに眠る者を伴って。家族の中の、友の中の、世界中の眠っている者たちのために、わたしたちも祈るのです。